特　集

企業史料の保存と利活用

大島　久幸

高千穂大学教授（特集担当エディター）

『企業家研究』第 24 号では，特集テーマとして「企業史料の保存と利活用」について，特集しました。以下では，特集の趣旨と掲載された論文の内容を紹介します。

経営学や経営史研究において企業史料の存在は不可欠です。しかし，日本企業の国際的競争力の相対的低下に伴う経営余力の減退や企業におけるデジタル文書史料の増加によって，企業史料が今後も後世に残されていくのかという点で，不安が増大しています。たとえば，これまで企業史料を整理保存する重要な機会になっていた社史の刊行に関しても，2000 年代に入って，かつて社史大国と呼ばれた状況から大きく変化し，質・量ともに低下している点がたびたび指摘されています。また，企業史料のデジタル化は，保存の難しさとの量の膨大さによって，企業アーカイブズに大きな変革を迫っています。他方で，企業史料は，公文書と異なり私文書であるため，一義的には企業自らが管理・保存し，公開についてもその可否を判断することになります。こうした状況に関して，研究者側でも企業史料の社会的・歴史的価値の重要性を積極的に発信する必要性が高まっていると言えます。

そこで本特集では，企業史料の保存の現状や課題，さらにはその利活用の可能性についての共通理解をはかるため，企業史料に関する論説を掲載しました。

本特集では，5 つの論文を掲載しました。

阿部武司「企業史料協議会の 40 年―1981 年～2020 年―」では，日本における唯一のビジネスアーカイブズ専門機関である企業史料協議会の活動の軌跡をたどりながら，その意義を考察しています。

清水ふさ子「近代日本における企業の記録管理と社史編纂について」では，近代日本企業における記録管理者及び担当組織がどのように位置づけられてきたのかを，具体的事例をもとに確認するとともに，現在の社史の形式が定着した昭和前期の第一次社史ブームにおける編纂体制，資料収集状況を検討することによって，近代日本の記録管理と社史編纂事業の関係性を考察しています。

山田弥生「インターナルブランディングによって企業価値向上に貢献する企業アーカ

yrm0013_03_特集01_大島／念.indd　27　2024/07/03　10:46:32

イブズを目指す―キリングループアーカイブズの事例―」では多様な企業アーカイブの中のひとつであるキリングループアーカイブズの現在の活動と特色，インターナルブランディングの施策事例と，エクスターナルブランディングへの活用による企業価値の向上への取り組み事例が紹介されます。

高柳直弥「企業家を扱う企業博物館の傾向に関する考察」では，これまでに蓄積されてきた企業博物館に関する議論をもとに，企業博物館の在り方を整理する枠組みを提示するとともに，その枠組みをもとに，企業家を扱う企業博物館の傾向や変化を考察しています。

井澤龍「企業史料の行方―アメリカ合衆国における企業史料保存運動史と収蔵レポジトリ調査からの考察―」では，アメリカにおける企業アーカイブズ保存の歴史と現状を，広範な文献サーベイと悉皆的な企業資料情報の調査に基づいて検討しています。

いずれの論文も企業史料の可能性や今後を考えるうえで貴重な示唆を与えてくれるものです。各論文が，私たちの研究の基盤となる企業史料について考えるきっかけとなってくれることを祈ります。

最後に，本特集にあたって，査読者の方々には論文の審査編集にご協力いただき，たいへん有益なコメントをいただきました。この場をお借りして，すべての投稿者および査読者の方々に厚く御礼申し上げます。また，田中一弘委員長をはじめ編集委員会の方々および企業家研究フォーラム事務局には，編集準備や審査過程でご助言ご協力いただいたことにも感謝申し上げます。

yrm0013_03_特集01_大島／念.indd　28　2024/07/03　10:46:32